

## 高井收教授退任に寄せて

言語センター教授 大 島 稔

高井先生は、助手時代の2年を含めて本学に約30年間勤められ、2013年3月をもって退職され、4月には、その長年の研究・教育における本学への貢献に報いて名誉教授とされました。

高井先生の研究分野は、広義に言う英語教育学における「第二言語としての英語教育」(TESL=Teaching English as a Second Language)です。この分野で誤答分析などの言語習得、あるいはメディアを教材にした授業の分析から英語学習環境の分析などに幅広い分野にわたる研究を公刊されています。後に、「異文化間コミュニケーション論」(Intercultural Communication)も専門分野とするようになりました。研究・教育のために退任直前まで毎年のように訪米し、アメリカの英語教育学会、英語教育・異文化間コミュニケーションに関するセミナーやワークショップに参加し、学会の新動向にも目を配る熱心な先生です。

高井先生の担当された授業は、教職課程の「英語科教授法」と「比較文化」、大学院での「異文化コミュニケーション」、「1, 2年生の英語」で、理論的な研究は、授業に生かすという、まさに本大学のモットー「品格、語学、実学」にふさわしく実践としての学問を追及した教育者と言えます。

教職の「英語科教授法」で教える内容を自分でも一般英語教育の授業で実践する。たとえば、すでに助手時代に当時の「外国人教師」を補佐した授業で、英語を使って英語を教える授業を始めている。この教授法は、2013年4月より「英語による英語の授業」(TETE=Teaching English through English)が全国の高校で開始されたが、本学で日本人教員が英語で教える授業は、高井先生が嚆矢であると言えるでしょう。最近ではOral Introductionと

いう「教材の概要を英語で紹介し、スキーマを準備させてから開始する授業」を実践していました。

現在では、本大学でも国際交流が当たり前のようにおこなわれていますが、その制度を作る初期段階で尽力した一人が高井先生です。「国際交流センター」などの事務組織がなかった時代に教員がみずから、学生の留学の手配をしたり、交流クラブの学生組織を作ったのも、高井先生で、自らも留学経験がある短期語学留学、長期留学が学生にとっていかに大切かを知っている高井先生だからこそ熱心に姉妹校締結、留学制度作りに精を出せたのだと思います。

この基礎的な仕事があったから、外国語としての日本語教育が正式にカリキュラムに組み込まれ、英語による留学生教育の短期プログラムが本学に作り出されたのであります。

高井先生は、また短期プログラムの外国人留学生を「比較文化」、「ゼミナール」の授業に受け入れていました。これにより、日本人学生と留学生がともに、英語を使って異文化を学習するという新しい授業形態を作り出しました。

英語科教職の教科科目が改正され、「異文化理解」科目や「英語コミュニケーション」科目が増設され、「英語科教授法」の単位が増加された時も、専門とする高井先生がいたのが大いに英語科の助けとなりました。それ以後、高井先生は、「比較文化」「英語科教授法」を自ら担当するとともに、その後英語教育・応用言語学の教員を新規採用する際にも高井先生の存在は大きなものでした。大学院に「異文化理解コース」が新設される際には、センター長の君羅先生を中心に立案され、高井先生を始め、新たに加わった応用言語学関連の教員が数多くいた事ですみやかに実現されました。今や、英語科は、実践の学である応用言語学が中核となって動いています。

言語センターに関わる仕事として、高井先生は、君羅先生のセンター長時代に、副センター長を3期6年間務められました。また、英語科は、「英語による英語の授業」を実践するかのようになり、会議の公用語が英語となっており、英語の授業もすべて「基本的に英語で」の方針が貫かれています。これも

高井先生の強い意志があったからです。

高井先生の学外での活動は、多くあるのですが所属学会が違う者にはあまり伝わってきません。知り得る範囲では、第一に大学英語教育学会(JACET)北海道支部の活動にも早くから参加し、副支部長を経て、支部長兼理事として尽力されたこと。また、大学入試センター英語部会の出題委員として、また、英語部会の部会長として客員教授になり、その後、各部会を調整・統括する委員として尽力されました。この研究・教育の合間をぬっての大学入試センターの仕事は実に9年に及びます。

以上のように英語科に、言語センターに、大学に、あるいは全国レベルで高井先生のなされた貢献は、英語教育を中核としながらも多面的です。

最後に、私事にわたる事で申し訳ありませんが、高井先生の趣味は、民謡でしたね。いつから歌っているのか知りませんが助手時代に防音の効いた「録音室」で歌っていたのを覚えています。小樽で「江差追分」を習いに手宮まで行っていましたから日本に帰国して助手になってからだと思います。全国大会で入賞するなどしていますから、もう趣味とは言えないのかも知れません。卒業生もよく先生の「教授法」を覚えていますし、「江差追分」を話題にします。

30年もの長きにわたる本大学での奉職、御苦労さまでした。高井先生の奥様の瑞枝さんは、著名なフードコーディネーター（著書に『食の架け橋 ひとり旅一食一会』彩流社（2009）がある）です。退職後の人生は、奥様と一緒に悠々自適に過ごされることと思いますが、いつまでもお元気に時に「江差追分」を歌いながらお過ごしください。最後に、先生からいただいた数々のご助言とご教示に、英語科一同になりかわりまして感謝の辞を述べます。